

---

# HERO

青

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HERO

### 【Zコード】

Z8252A

### 【作者名】

青

### 【あらすじ】

大好きな人がいた。一生懸命で、必死で、キラキラ輝く真夏の太陽みたいな人だった。私に頑張れと言つてくれた。初恋の夢だと、頑張ることの大切さを描いた物語。

私が先輩を見つけたのは、高校に入学して一月が経つた五月のある日。

教室に次の日提出の宿題を忘れたことに気付いた私は、学校に取りに戻った。

夜の七時を回つていて、人気のない学校は何か不気味だった。宿題を持って帰ろうとすると、トレーニング室から光が漏れていることに気付いた。

もうとつくて部活は終わってるはずだけど・・・誰かいるのかな？外の窓からそつと中を覗いて見ると、一人の男子生徒が筋トレに励んでいる姿が見えた。

野球部かな？

坊主頭と筋肉のついた一の腕にそう見当をつけた。何でこんな時間に一人で居残つてるんだろう・・・

半ば呆れながら見ていたら、一生懸命で必死なその姿に、何だか胸が締め付けられた。

その時、目が合つてしまつた。ヤバいと思いつつそらせずにいると、野球少年は私の元に向かってきた。

「一年生？こんな時間に何やつてんだ？」

「あ・・・忘れ物を、して・・・」

「ああ、取りに来たのか。」

「はい。」

思いの他背が高く、威圧感があるその人に、自然と声も小さくなる。

「じゃあ、早く帰んなー。危ねえぞ。」

ふ、と微笑んだ。

その笑顔が、余りにも綺麗で。見とれてしまった。

「どーした？」

顔が熱い。赤いだろ？と自分でも分かる。

「あの、こんな時間まで、一人で居残り練習ですか？」

「ん？ああ、上半身だけな、鍛えとこうと思って。」

不思議そうな顔をした私にその人は説明してくれた。

「俺、今腰痛めてるから練習できねえんだよ。ピッチャーなんだけどさ。だから体が鈍んじゃないよう上半身だけのトレーニングをしたの。」

分かった？と、小さい子にするような仕草で聞いた。こぐ、と頷くとまた柔らかく優しく微笑んでくれた。

「ほり、早く帰れー。ここも消されんぞ。」

「あの！名前は？」

思わず聞いてしまった。どうしよう。つつきとは比べものにならないくらい顔が熱い。

「3年2組、岩田達也。気を付けて帰れよ！」

ペコッと頭を下げる、走って校門を出た。  
息を整え、歩きながら、イワタタツヤ・・・岩田先輩・・・呟いた  
私の姿は不気味だつただろう。

次の日、学校に着くとすぐに同じクラスの野球部員、早川の元へ向かつた。

「はやかわ、はやかわー岩田先輩ってどんなひと？」

「はあ？ いきなり何？」

「昨日ちょっとだけ喋ったの！ どんなひと！？」

私の勢いに押されて、早川が説明した岩田先輩はこんな人だった。

野球部のエースで、一年生部員の憧れ。

誰よりも一生懸命で、野球に対する情熱は半端じゃない。

マウンドに立つと人が変わる。

負けず嫌い。

厳しいけれど優しい人。

「で、努力家なんだ！ 岩田さんはさ、天才とか才能があるとか言  
われてるけど、影で誰よりも努力してんだよ。天才なんかじゃない。  
努力の人なんだ！」

目をキラキラさせて、岩田先輩について熱く語ってくれた。

努力家なのは知ってる。野球が大好きなのも。  
じゃなければ、たった一人であんな時間まで居残ることなんて出来  
ないだろ？

「・・・何、加藤。岩田さんに惚れた？」

ニヤニヤしながら聞いてくる早川の頭を思わずカバンで叩いてしま  
った。

「何すんだよ！？」

「変なこと言うからでしょ！？ そんなすぐ好きになる訳ないじゃな  
い！」

「ふうーん・・・」

疑わしげな目で見てくる早川は放つておいて、席に戻ろうとした。  
私の背中に、早川が一言投げ掛けた。

「岩田さん、彼女いるよ。」

「・・・別に、関係ないし。」

そう、関係ない。

好きな訳じゃない。

あんな、数分話しただけの人を好きになつたりしない。  
ただちょっと、カッコイイなって思つただけ。  
ほんとにちょっと。

好きじゃ、ない。

泣きそうなのは、気のせいだよ。

お昼、私は購買の帰りだった。

ふとトレーニング室を覗くと、岩田先輩がいた。

「岩田先輩！」

「うわっ！」

いきなり後ろから声をかけたから、凄く驚かれた。

「あ、昨日の。脅かすなよ。」

「ごめんなさい。お昼もトレーニングですか？」

「ん。すぐ夏の大会が始まるからなー。」

「あ・・・同じだ。」

朝、岩田先輩について語つてくれた早川みたいな、キラキラした目をしている。

「どうして、そんなに一生懸命なんですか。」

「え？」

「あ、ごめんなさい・・・でも、何で、そんなに頑張れるんですか？」

その時私は、夢中になれるものなんてなくて、好きなこともなくて、何となく入った高校で部活も入らず何となく毎日を過ごしていた。岩田先輩を見ていたら、そんな自分が無性に情けなくなつた。

「甲子園に行きたいからだよ。」

「でも、どんなに頑張つたって無理かもしれないのに・・・」

言葉にしてから、しまつたと思った。怒られる！

そう思つて身構えたけれど、岩田先輩は優しく笑つて言つた。

一 確かにな  
甲子園に行けるのなんて遙く低い確率だよ  
ハセの高  
校より強いところだつてたくさんある。

でもな、可能性はゼロじゃない。俺が野球部員である限り、一緒にプレーする仲間がいる限り、甲子園を目指すことが出来る。行けないかもしれない。だけど行けるかもしれない。

「頑張ってたら少しでも近付くかもしないだろ?」

私に話しかけてくれて、おやじの洗濯の童よ、遠くを飛んで

甲子園を見ていた。

やっぱり、この人綺麗だな。

高校生の男子に絶対たんて形容語はふさわしくないかもしれないけれど、今私が知ってる言葉の中で、岩田先輩を的確に表現できるのはこれだった。

眞っ黒に日焼けした肌も、均等についた筋肉も、夢を語る瞳も、笑顔も、心さえも、綺麗だと思った。

## 一昼夜休み終わるぞ？

「あ、もう行きます。邪魔してごめんなさい！私は、一年三組の加藤光です。また来ても良いですか？」

「政治二年」

そう言って笑つた石田先輩は、やつぱり綺麗だった。

次の日も、その次の日も購入の帰りはトーニング室に寄つた。

ほんの数分間が楽しくて仕方なかつた  
私は、早川の言葉をすつかり忘れていた。

トレーニング室に通い始めて五日目。

「田中さん……」

いつもの様にトレーニング室に入らうとしたら、そこにほこりと違った光景があった。

「あ、あなたがひかりちゃん？」

岩田先輩の隣に立っている女の人が、微笑みかけてきた。

私は入口にぼーっと立ち尽くしたまま、黙つて頷いた。

「私、野球部のマネージャーやつてます、水谷百合です。達也からよく話を聞いてたの。会えて嬉しいな。」

名前の通り、花の様に可憐な、素敵な女性。

「達也がね、面白い一年がいるつていつも言つから、会つてみたいと思つてたの。」

「つたく、だからつてトレーニング付き合わなくて良いつつたのに…」

「良いじやない、たまには。」

ああ、分かつてしまつた。

「あ、あの、私今から用事があつて、もう行かなくちゃいけなくて…

・・それじやあ…」

逃げる様にトレーニング室から飛び出した。

あのひとが、岩田先輩の彼女だ。

言われなくとも、分かる。

だつて、岩田先輩の笑顔はいつだつて優しかつたけど、あんなに温かな笑顔は初めて見た。

あんな愛しそうな瞳は初めて見た。

宝物を見つめるような、嬉しそうな顔を、私は初めて見た。

渡り廊下を走り抜けると、誰かに呼び止められた。

「お前、どうしたんだよ…！」

早川だ。悪いけど、今あんたの顔見たくないよ。早川が悪い訳じやないことくらい分かつてること。

早川は、焦つた様に私に持つていたタオルを被せた。大きめのそのタオルは、私の視界を遮つた。

「何泣いてんだよ…？」

泣いてる？誰が？私が？

その時初めて、自分の頬が濡れていることに気が付いた。

私、泣いてるんだ。

私、岩田先輩のこと好きなんだ・・・

そう思つたら一気に涙が溢ってきた。

声にならない嗚咽を上げて、私は泣いた。

昼休みが始まつたばかりで良かつた。

渡り廊下に誰もいなくて良かつた。

涙を拭いて前を見ると、早川が困つた様な顔をして立つていた。

「タオル、ありがとう。洗つて返すね。」

「あ、ああ・・・」

「岩田先輩の彼女つて、マネージャーさんだつたんだね。」

「・・・ああ。」

「凄く仲良しだから、すぐに分かつたよ。綺麗で、優しそうな人。」

「凄く、お似合いだと思った・・・」

早川は何も言わない。

じつと私の隣に立つてゐる。

「私なんて、敵いつこないなあ・・・」

涙がこぼれそうになつて、空を見上げた。

悲しいくらい青い空が広がつていた。

「あの二人、いつから付き合つてるの？」

「一年のときからつて、聞いた。」

「・・・長いなあ・・・」

私なんて、好きつて気付いたのついたきだよ。

「私が、一年早く生まれてれば・・・何か違つてたかなあ・・・」

「・・・」

「違うね。たとえ私が一年早く生まれて、同級生にいても何も変わらない。無気力だし、やる気ないし。

マネージャーなんて絶対やるひつとしてないもん。岩田先輩はやっぱりあの人を選ぶんだろうな。」

「

彼女は、岩田先輩と同じ夢を見ている。

岩田先輩と同じ夢を見ている。

岩田先輩が彼女を好きになつたのは、きっと運命だったんだね。

だけど、私が岩田先輩に出会つたのも、運命だと思いたいよ・・・

「羨ましいな・・・」

心の底から思つた。

「あのさ！大丈夫だよ・・・たつた一年じゃんー。どうでもなるー。」

必死で励ましてくれる早川の優しさが嬉しかつた。

「敵わないことないって！加藤、そんなに悪くないよ。」

真つ直ぐ私を見て言つてくれる。早川の、精一杯の褒め言葉。

女の子に可愛いなんて、絶対言えない奴だから。

嬉しかつたよ。

「ありがとう。」

次の日から、また何となく過ごす日々が始つた。

昼にトレーニング室へ行くことはなくなつた。

岩田先輩に出会つ前に、戻つただけだ。

だけど、私の中から岩田先輩の存在を消すことはできなかつた。

階段でそれ違つたとき一瞬だけ目が合つて、振り向いて微笑んでくれたことが嬉しかつた。

廊下ではしゃぐ楽しそうな姿を見るだけで、幸せだつた。

早川から、岩田先輩の怪我が完治して、普通の練習メニューに戻つ

たことを聞いた。

嬉しかつたけれど、もつトレーニング室に来ないのだと思つと少し悲しかつた。

私も、行くことは出来なかつたのだけれど。

時々、お昼に岩田先輩と百合さんが一緒にいるのを見かけた。廊下の隅っこで、外を見ながら楽しそうにお喋りをしている。二人の世界。

そんなとき私は屋上に行つた。時々早川もやつて来て一緒にお昼ご飯を食べた。

学校で一番空に近い場所だから、気持ちが神様に届くかもしれないと思った。

岩田先輩に届かなければ、意味がないのだけれど。分かっていて、何も出来なかつた。

あの二人の間に入つていいくことなんて出来ない。

だって岩田先輩は百合さんのことが本当に好きなんだ。ずっと見ているから、分かる。

困らせたい訳じやない。幸せを壊したい訳じやない。

ほんの少しで良いから、あの真つ直ぐな瞳に私の姿を映して欲しいと思つてた。

「だいすき・・・」

小さな声は青い空に消えていつた。

ある日私が帰るうと校門を出たところで、偶然岩田先輩に出会った。

「よお。久しぶりだな。」

私が呆然としていると岩田先輩から声をかけてくれた。

「今帰り？」

「はい。」

普通に、普通に。動搖しちゃダメだ。自分に言い聞かせた。

「じゃ、駅まで一緒に行こうぜ。」

心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。一緒に帰る！？私と、先輩が！？

夢じゃないかと思った。

「彼女さんは、良いんですか？」

心臓がキュウとなるのを感じながらそう聞いた。

「今日委員会……って彼女って何で知つて……」

バレバレなのに。自分じゃ気付かないものなんだろうか。

「早川に聞きました。」

「あいつ……明日は校庭十周だな。」

「他の女と一緒に帰つて良いんですか？」

「それくらいで怒るような奴じゃねえよ。」

顔を少し赤く染めて、岩田先輩は言った。

百合ちゃん、「ごめんなさい。私今、別れちゃえつて思った。

心底、この人の彼女になりたいと思った。

ふと横を見ると、また少し引き締まつてたくましくなつた様な気がする。

頑張ってるんだ。

「どーした？」

私の視線に気付き、岩田先輩が問掛けた。

「綺麗だなあと思つて。」

「はー？」

驚いてる。いきなり綺麗なんて言われたら当たり前か。

「日焼けして真っ黒な肌も、引き締まつた筋肉も、堂々としたオ

ラも、全部綺麗です。

頑張ってる人つて綺麗なんですね。」

「あー・・・」

先輩は照れた様に坊主頭をかきながら、ぶつかりぼりついにありがとうございましたと言った。

「カツコイイなあー・・・夢中になれるものがあつて。」

「お前はないの?好きなこととか。」

「分かりません。」

「まあ、その内見つかるよ。焦んな焦んな。」

な?と言って頭を撫でてくれた。

ダメだよ、先輩。

そんなことしたら本人にその気が無くても、女の子は期待しちゃうよ。

「もおすぐですね、大会。頑張って下さいね。」

「ああ!」

力強く頷く先輩を、頼もしいと思つた。カツコイイと思つた。

「やっぱ彼女さんに、甲子園に連れてつてやるとか言つんですか?」

「・・・まあ、マネージャーだし、な。」

「何か良いなあ、そーゆーの!」

冗談っぽく濁したけれど、本音だった。

「じゃー、お前も連れてつてやるよ。」

そう言つてまた頭を撫でた。

え!?と顔を見ると、ニッと笑う先輩がいた。

本気で、死ぬほど嬉しかったんだ。

あたしが言わせた様なものだけど、それでも良い。

”お前も”だけど、それでも泣きそうなほど嬉しかった。

「だから試合の応援来いよ。」

喋つたら泣きそだつたから、しつかり頷いておいた。

家に帰るとすぐに早川に電話した。良かつたなあと言つてくれた。

「早川の応援もするよ。」

「俺は出ねえよ。一年はほとんどスタンバ。」

「なーんだ、そうなの。じゃあ一緒に応援頑張りうね。」  
話しながら、電話の前で自然と微笑んだ。

「最近、お前良い感じだな。」

「え？」

「一生懸命で、楽しそう。」

お世辞でも嬉しかった。

そうか、わたし楽しそうなんだ。

岩田先輩に恋をして、一生懸命なんだ。

不毛な恋。

それでも一生懸命だった。

それから半月後、夏の県予選が始まった。

岩田先輩の背中には『1』番が輝いていて、マウンティング姿は今まで一番カッコ良かつた。

そんな岩田先輩を、一番傍で見守ることができた自分が羨まし

くて仕方なかつた。

私の学校はノーシードだつたけれど注目されていたから、一回戦から結構たくさん的人が試合を見に来ていた。

私ももちろん全試合見に行くつもりでいた。  
早川に、スタンドの一番前に来いよと言われたけれど、そんな野球部の応援団の中には入れない。

そう言って後ろの方でこっそり応援した。

岩田先輩が三振を取る度にこっそり拍手していた。

私が来ていることに、岩田先輩は気付いていないかも知れない。  
それでも良い。

野球をしている岩田先輩は別人の様で。  
きっと対戦相手しか見えていないのだろうと思った。  
照りつける太陽の暑い陽射しの中、あんな暑そうなユニフォームを着て、一生懸命プレイする選手のみんなはこの上なくカッコ良かつた。

みんな、キラキラしていて綺麗だと思った。

順調に勝ち進んで、ベスト16。

これに勝てば十年ぶりのベスト8。

優勝すれば初の甲子園出場。

試合の前日は、ドキドキして疲れなかつたよ。

その日まで、私は甲子園に行くのは岩田先輩たちだと信じて疑わなかつた。

寝ていないうちに容赦なく降り注ぐ陽射しはとても辛かつたけれど、試合が始まればそんなこと忘れてしまつた。  
点が、入らない。

私の学校は先攻で、一回から岩田先輩が登板していた。

相手校は優勝候補と謳っていた高校で、ピッチャーは超高校級だつたらしい。

打てないのだ。見事に三者凡退に抑えられる。

けれど岩田先輩も抜群のコントロールで、打たせて取っていた。  
バックを、仲間を信じていた。

事件は6回に起きた。

相手校の攻撃中。

打球はピッチャーライナー。

危ない、と思つた。

その次の瞬間には、岩田先輩はマウンドにしづくまつっていた。  
右腕を押さえて。

打球が右腕に当たつてしまつたのだ。

一瞬だけ見えた、泣きそうな顔を私は忘れることができない。

球場がざわめき、すぐに審判と救護班が岩田先輩に駆け寄つた。  
先輩はベンチに入り、治療のため試合を中断すると言うアナウンス  
が流れた。

気付くと私はスタンドの一一番前で、バッケネットにしがみついていた。

隣に早川がやつて来て、肩に手を置いて言つてくれた。

「大丈夫だ。」

と。

大丈夫。岩田先輩なら大丈夫。  
こんなところで終わらないよ。  
だつて甲子園に行くんだもん。

彼女を、連れて行つてあげなきやいけないでしょ?  
私も、連れて行つてくれるつて言つたでしょ?

甲子園に行くのは岩田先輩だよ。

二十分ほどして、試合が再開された。

マウンドには、岩田先輩が立つていた。

球場に大歓声が響いた。

思わず泣きそうになつてしまつたのを、早川に気付かれないようこ  
必死で隠した。

岩田先輩は迫力のピッチングで三振を取り、6回も0点に抑えた。スタンドの野球部員たちは、岩田先輩の腕が心配で仕方ない様子で話していた。

「あんな鋭い打球が当たつて、平気な訳ねえんだよ。」

「今は氣力で投げれても、無理したら腕ぶつ壊れるかもしんねえんだぞ！？」

「監督、何で達也に投げさせてんだよ…」

どうか、どうか勝たせて下さい。

あんなに汗をかいても、痛くないはずのない腕を振り上げて、一生懸命野球をしている岩田先輩から、野球を取り上げないで下さい。その時だつた。さつき以上の歓声が球場を包んだ。

4番の笠井良先輩の、ソロホームラン。

7回で、とうとう先取点。

鳥肌が立つた。

その後もランナーは出たけれど、点は入らなかつた。それでも、希望は膨らんだ。

みんなが、岩田先輩の気持ちに応えよつとしている。全員で、勝ちに行つてる。

頑張れ、頑張れ。

7回の裏、マウンドに立ち、必死で投げる岩田先輩の姿を見ていたら、いてもたつてもいられなかつた。

「いわたせんぱい！ がんばつて！！」

叫ばずにはいられなかつた。

願わざにはいられなかつた。

こんなに誰かの笑顔を望んだのは、初めてだつた。

一点差。あと3回抑えれば、勝てるんだ。

7回も抑えたけれど、心なしか岩田先輩の顔色が悪い氣がする。辛そうに、見えた。

8回の攻撃は、打線が繋がらずランナーが出るも惜しくも0点。裏では、マウンドに立った岩田先輩の顔色は戻っていたけれど、腕が振れていないう気がした。

一人目は打ち取つたけれど、一人目の打者はフォアボールで出塁。球威も制球力も落ちている。

三人目は、デッドボールだった。

この大会で、初めて見る岩田先輩の「デッドボール」。

「アウト」、二塁になってしまった。

キャッチャーがタイムを取り、選手がマウンドに集まる。

何を話しているか分からないうけれど、岩田先輩の顔に笑顔はなかった。

けれど、キャッチャーの目を見て首を振り、何か言つたのが分かった。

推測でしかないけれど・・・

降りるかと問われ、大丈夫だと答えたのだろうと、思った。

最後まで俺が投げると、岩田先輩なら絶対そう言つ。試合が再開された。

次の打者は犠牲フライで、一人ずつ進塁。

「アウト」、三塁となつた。

あとアウト一つだ。今、一点差でリードしていくことに変わりはない。

そう思つたときだった。

甘めに入ったストレートを、打者は見逃さなかつた。

打球は、ライト方向に伸びる・・・

信じられなかつた。信じたくなかつた。

ボールがライトスタンドに落ちる。

相手スタンドで悲鳴にも似た歓声が沸き起つた。

次々とランナーがホームに帰つてくる。

バックボードには、三点が。

逆転ホームラン。

岩田先輩は、汗を拭い次の打者に向き合つた。

汗。きっとそう。涙じゃない。泣くのは、まだ早いよ。

打者をファーストゴロに打ち取り、最終回を迎えた。

1番から始まる打線。最高の打線だ。

4番の笠井先輩に繋げば・・・きっと、きっと。

1番はヒットで出塁。2番はバントで1アウト1塁。

3番は犠牲フライを上げたが、相手の捕球Hマーで出塁。1アウト  
1、3塁になつた。

応援団の声援。吹奏楽部の演奏。観客の歓声。全部遠く聴こえた。  
ただひたすらに、両手を組んで祈つた。

どうか届いて。

笠井先輩の打球は、三遊間ヒット！

わああっと歓声が沸き起つた。

けれど・・・

さつきのHマーをフォローするかの様なファインプレー。

ゲッター・・・

相手ベンチから選手が飛び出し、抱き合つていい。

グランドで選手が泣き崩れている。

全てが遠い世界での出来事に感じた。

試合終了を告げるサイレンが鳴り響き、選手が整列して挨拶をし、握手を交わしている。

選手、監督、マネージャーがバックネット前に並び、スタンドに頭を下げて挨拶をする。

岩田先輩がキヤッチャーの先輩に肩を支えられ、深く深く頭を下げる。

そのまま、頭を上げない。上げられないんだ。

がっしりとした広い肩が、小刻みに震えているのが分かつた。

私の頬に、温かいものが伝う。

もう、涙を隠そなんて頭になかった。

その場に、泣き崩れてしまった。

せんぱい。せんぱい。涙が止まらなかつたよ。

おもむやの様に溢れ出る涙を、どうやつて止めれば良いのか分からなかつた。

いつかの昼休みの様に、早川がわたしにそつとタオルを被せ頭を撫でた。

あの時と違つのは、タオルじに伝わる早川の手が、震えていること。

私より早川の方がずつと悔しいはずなのに。

尊敬する先輩たちに、今すぐ駆けつけて一緒に泣きたいはずなのに。早川はすつと泣きじやぐる私の隣で、声を殺して歯を食いしばつて泣いていた。

しばらくして涙が止まると、グランドには誰もいなかつた。スタンドも、まばらに人が残つてゐるだけだつた。

「加藤、俺集まんなきや いけないからもう行くけど・・・

「あ、うん。ごめん早川、付き合わせちゃつて・・・」

「いや、全然良いよ。お前も来る？先輩に、会つてけば？」

「ううん・・・良いや。帰るね。」

本当は会いたかつた。だけど、会つたといひで何を言つて良いのか分からぬ。

無理に言葉にしようとして、てきとうに安っぽいありきたりなことしか言えない気がした。

きっと岩田先輩の隣には百合さんがいる。

何も言わず、ただ隣に静かに寄り添つて支えている姿が目に浮かぶ。正直、見たくなかつた。

それに、選手の多くは悔し涙を流してゐるだろ。

ユニフォームを泥だらけにして、目を真つ赤にして、お互ひを讚え合い泣いてゐるのだろ。

その涙は、頑張つた証。

一生懸命だつた証拠。

そこに、あたしはいぢやいけない。そう思つた。

あの試合から一週間。

甲子園では、各都道府県を勝ち抜いてきた強豪校たちが頂点を勝ち取るために戦っていた。

私の県からは、激闘を制したあの高校が甲子園出場を決めた。  
悔しいけれど、頑張つて欲しいと思つ。

ある晴れた日。

テレビでは関西の高校と東北地方の高校の試合を中継していた。  
私は、学校の屋上で空を眺めていた。

夏休み中だから、部活動の生徒しかいない学校は、いつもとはまた違う雰囲気に包まれている。

ふとグランドに目を向けると、そこでは野球部が練習していた。  
三年生は引退し、一、二年生の新チームがそこにいる。

屋上からでは誰が誰かなんて分からぬけれど、早川も汗だくになつて練習しているのだろうなと思つた。

その時、背後でガチャッと屋上の重い扉が開く音がした。

反射的に振り向くと、そこには思いもせぬ人が立っていた。

「よお。」

少し伸びた髪の毛に、Tシャツにジーパンという姿だけど、笑顔は何も変わらない。

大好きな、あの笑顔。

岩田先輩の笑顔。

思わず泣きそうになつて、顔を戻しましたグランドに視線を落とした。すると、岩田先輩は私の隣に来て、同じようにグランドを眺めて言った。

「おー、あいつらしつかり頑張つてんなあ。」

「・・・どうして、ここに?」

「ん? 早川に聞いたら多分ここだつて言つたからさ。」

「私に、何か用ですか?」

全く可愛げのかけらもない。だつて氣を緩めたら涙が溢れそうだった。

数秒の間に、先輩はゆつくりと言つた。

「甲子園、行けなくてごめんな。」

「先輩のせいじゃないつ!」

思わず私は先輩の方をしつかり向いて言つた。

「うん。それでも、連れてつてやるつて言つたのに、約束守つてやれなくてごめんな。」

ああ、どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。どうしてこんなに真つ直ぐなんだろ。抑え切れなくなつた涙が零れた。

「俺さあ、野球辞めようかと思つたんだ。あの試合で打球が腕に当たつたろ? それでも投げ続けたから、肘が炎症起つててさ。ずっと野球ばつかやつてたから、良い機会なのかもしれないと思つた。でも、あの試合で投げきることができたのは、

野球が本当に好きだからだ。本当は感覚なんてなくなつてたよ。それでも投げられた。勝ちたいって気持ちだけで。

まあ、結局負けたけどな。それでも、あそこで降りてたら後悔が残つたと思う。投げきれて良かつた。

お前の声が聞こえたよ。がんばってつて、ちゃんと届いた。あんまり必死な声だつたから、頑張んないとやべえなつて思つた。負けたけど、最後まで頑張れた。応援来てくれてありがとな。

「・・・」

私は何も言えずに泣き続けた。

言葉になんてならなかつた。

「でさ、思つたんだ。俺、やつぱり野球が好きだ。投げれなくなつた訳じやない。リハビリでも何でもやつてやるよ。

もう高校野球には戻れないけど、野球に関わつてたいんだ。またこの学校に、指導者として戻つて来れたら良いと思つてゐる。

大学でも、野球続けるよ。また頑張るよ。野球が、大好きだからさ。

「それだけ言つて、今まで一番綺麗に微笑んで、岩田先輩は背中を向けた。

「岩田先輩！」

先輩がドアノブに手をかけたとき、私はとつさに呼び止めていた。先輩が驚いた様に振り返つて、どうした、と田で問う。

「私、岩田先輩になりたかつた。大好きなものがあつて、夢中になれることがあつて、夢があつて、一生懸命で、キラキラ輝いてて・・・

・ そんな先輩がずっと羨ましかつた！私も、一生懸命何かに頑張つて、心の底から泣いたり笑つたりしたいと思つた。」

一拍置いて、呼吸を整えて、

「私ね、デザインの勉強をするつて決めた！！」

「言えた。一週間、ずっと考えていたこと。

「小さい頃、絵を描くことが大好きだつた。時間も忘れて夢中で、一日中でも描いていられた。上手だつて褒められると嬉しかつた。だけど、そんな気持ち成長するにつれて忘れていつた。好きなこと

も夢も見失つて、ただ何となく毎日を過ごしてた。

そんな私に、一生懸命頑張るつてカツコイインだつて、綺麗なんだつて、そう教えてくれたのはあなたでした！

もう迷わない！諦めない！夢を持つことも頑張ることも、無謀だなんて思わない。

泥だらけのユニフォームで、汗だくになつて笑う先輩は、凄く凄くカツコイイと思つた。綺麗だと思つた。

私も、先輩みたいに輝けるかなあ！？

敬語を使うことも忘れ、涙声になりながらも伝えた。

岩田先輩は真つ直ぐ私を見つめ、黙つて聞いていてくれた。そしてさつきよりもゆっくり、一言ずつ言葉を紡いだ。

「光。お前にぴつたりの、良い名前だな。出来るよ。お前なら大丈夫。今、俺に夢を語つたお前は凄く輝いてたよ。

自分に負けんなよ。頑張れ！！」

最高の笑顔のエールを、先輩は私にくれた。それだけでどこまでも頑張れる気がした。

私が初めて本気で好きになつた人は、凄く凄く素敵な人だつて胸を張つて誇れるよ。

報われることはなかつたけれど、好きにならなければ良かつたなんて思つたことは一度だつてないよ。

岩田先輩に出逢えて良かつた。岩田先輩を好きになれて良かつた。あなたに恋をして一生懸命だつたあの日々は、私の大切な宝物。こんな私に笑いかけてくれて、名前を呼んでくれて、頑張れつて言つてくれて・・・

本当にあつがいになりました。

十年後。

八月のある日。夕方のテレビコースでは高校野球の特集をやっている。

県代表に決まった高校の特集だ。

アナウンサーが選手一人一人に尊敬する人は?とインタビューしている。

監督と答える選手が多い中で、父親やプロ野球選手の名前を出す者もいた。

そして真っ黒に日に焼けたピッチャーの少年は、満面の笑顔でこう答えた。

「コーチです！」

と。

それを聞いたアナウンサーがこう言った。

「そういえば、コーチの若田達也さんはこの学校の卒業生でしたね。在学中はエースナンバーを背負い、堂々たるピッティングで、精神面でもチームを支える素晴らしい選手だったと聞いています。」

それでは甲子園でも優勝を目指して頑張って下さい。と締めくくり、場面はスタジオへと変わる。

「今の子、そつくりだなあ・・・」

私はゆつくり微笑んだ。

トントンと部屋がノックされ、急かすような声がドア越しに響く。

「光さん！ 新しいデザイン画上がつてますか？」

「はーい！ できてるよ！ 今開けます。」

さあ、仕事が一段落したら母校の活躍を見に、甲子園でも行こうかな。

(後書き)

半分実話です。

評価、批評、感想などありましたらよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8252a/>

---

HERO

2010年12月7日02時37分発行